

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ディルタイの文芸学について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1992-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/730

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ディルタイの文芸学について

渡 辺 国 彦

I

はたして文芸学 (Literaturwissenschaft) が学術 (Wissenschaft) の領域に属することができるのかという点においては、以前より様々な議論がなされてきた。自然科学のような客観的な研究が可能か、研究者の主観性に頼るほかないのではないかという批判である。

ドイツにおいても、主に 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて文芸学が学術的地位を主張する動きが盛んになった。実証主義的文芸学 (Positivistische Literaturwissenschaft)、精神史的文芸学 (Geistgeschichtliche Literaturwissenschaft)、作品内在解釈 (Werkimmanente Interpretation)、精神分析学的文学研究 (Psychoanalytische Literaturwissenschaft) などである。これに、つい最近までドイツ東地区で主流であり、急激に支持を失ったマルクス主義文芸学を加えれば、そのほとんどがでそろったことになるし、その他の流れもこれらの支流として理解できよう。

そのなかで、ディルタイ (Wilhelm Dilthey/1833-1911) の精神史的文芸学については、その立場をめぐって様々な議論がなされてきた。たとえば高橋義孝氏は『文学非芸術論』⁽¹⁾のなかで、H. リューディガーの小論『解釈と精神史の間—ドイツ文芸学の現状に寄せて』(Horst Rüdiger, *Zwischen Interpretation und Geistesgeschichte. Zur gegenwärtigen Situation der deutschen Literaturwissenschaft*) について述べている。リューディガーの論文は「美的なるもの」と「思想的なるもの」という芸術や文学作品のなかに共存する二つの要素は理論的にとらえようとする二律背反的な関係になるのを解明しようとする試みである。リューディガーは、「美的なるもの」をとらえようとする文芸学としてシュタイガー (Emil Staiger/1908-1987) の解釈学を、「思想的なるもの」をとらえようとする傾向にディルタイを挙げ、これらの間に第三の新しい研究方向の可能性を問うている。高橋氏はリューディガーの主張する解釈学的研究方向と精神史的研究方向の対立に反論し両者の間に対立関係をとらえることは無理であり、シェラー (Wilhelm Scherer/1841-1886) の合理主義との間に解釈学ならびに精神史の対立をみようとする。つまり解釈学を精神史の後を引き継ぐ「美的なるもの」を取り扱う文芸学に分類しているのである。

さらに高橋氏は、リューディガーが批判するディルタイの歴史主義の例としてディルタイの有名な『体験と詩作』(*Das Erlebnis und die Dichtung*)の序文『近世ヨーロッパ文学の歩み』を引用している。

「いかなる時代の文学創造も先行諸時代に制約されており、また過去の模範、手本が後の時代の文学創造に影響を与える。そして各国民のそれぞれに異なった天性、さまざまな傾向の対立、さまざまな文学者の多様性が一時代の文学創造を制約する。ある意味では、どんな時代においても詩文の花は今を盛りと咲いている。それにも拘らず近世諸民族の文学は、典型的な諸段階を通過する一つの共通の発展の線を示している。私はヨーロッパ文学の発展過程において、私が今ここで述べようとするドイツの詩人たちが登場した歴史的な位置を規定するために、その共通の発展路線を辿ってみようと思うのである。」⁽²⁾

リューディガーはこのようなディルタイの考え方を精神史や理念史などに代表される作品の外側の諸現象から作品を解釈することと解釈し批評しているのである。さらに批判の鋒先は、こんどはシュタイガーの解釈学が歴史を軽視していることにも向けられている。そのほかにもリューディガーの唱える批判がいくつか紹介されているのだが、ここでは直接の関係は少ないので、再現するのは差し控えたい。とにかく、リューディガーは両者を批判しつつ第三の折衷的な方法を提案し、その結論を高橋氏は内容空虚なものとして批判しているのだ。

高橋氏が述べるように、ディルタイの精神的な文芸学は現在ではシェラーに代表される実証主義的文芸学の対極としての位置づけは常識となっており、私が異論をさしはさむ余地はまったくない。しかし私にはディルタイの主張をシュタイガーに代表されるいわゆる「美的なもの」を対象にする文芸学に全面的に組み入れてしまうということにも抵抗を感じるし、リューディガーの主張するように「思想的なもの」としてとらえることにも同様に釈然としない。

たしかに、ディルタイの登場は、実証主義的文芸学の衰退に対して、熱狂的に迎えられ、単なる事細かな知識を集めるだけでそれに関連性を与えることができない二流の実証主義的な研究家の研究にとって衝撃的であった。後には、実証主義的文芸学がそうであったのと同様にステロ化した後継者を生み、ドイツ的内面性とかドイツ精神あるいは精神の貴族性などの合い言葉のもとに神秘化への道を辿り国家主義的な文芸学として利用されもした。また、マルクス主義的な文学観⁽³⁾への強力な防波堤の役目を期待されたこともあった。

以上のような精神史の経歴からもその「美的なもの」として評価は変わらず、作品内在解釈との類似性を指摘されることが多い。両者とも自然科学のような客観的な法則性をめざす実証主義的文芸学との対極にあるという主張だ。

しかし精神的文芸学の根底には、完全に作品の内部での解釈をめざす作品内在解釈とは違って、実証主義的な解釈とのつながりもあるのではないか。文学というものが「美的なもの」と「思想的なもの」の複合物であるように、ディルタイの文芸解釈もこの両者の間を何とかと

りもとうとする試みではないのか。つまり、文学研究における主観と客観の問題に何らかの解答を与えようとしているのではないか。文学研究における実証主義とは何かも含めて検討してみたい。

II

それまでの規範としての詩学 (Poetik) 中心の考えから、文学は歴史に依存する産物だという思想に到達した初期のドイツの文学者のひとりに、ヘルダー (Johann Gottfried Herder/1744-1803) がいる。

ヘルダーは、作品の違いをその成立状況の差に見た。ギリシャ演劇の三一致の法則は、ギリシャ演劇にとって意味のあるものではあるが、単純に他の時代の他の民族の演劇には移せないものだと見なした。彼は、人間の歴史の発展を“幼年期”“青年期”“壮年期”の3段階にたとえ、時代はそれぞれの独自性があり、民族や歴史や言語によっても個性が生じると考えた。

この歴史的な理解への要求と共にヘルダーにおいては、作者の魂への直接的な感情移入への要求がある。「魂だけが魂を発見し、天才だけが他の天才を理解し魅惑し感じることができるのだ」⁽⁴⁾という主張である。

ヘルダーは感情移入から得られた印象を言葉にしようとし、それぞれの作品の独自性を描こうとした。直感的な感情移入がジャンルを基準とする詩学にとってかわる。作者の心のプロセスを追体験することにより、感情移入が作品を規定する。読者の主観的な感情が解釈と価値付けの尺度となる。ただしそのためには、作品は作者と環境との間で生み出されたものであるから、作者の人生や成立した時代、影響を及ぼした作品、政治的あるいは社会的な背景、読者層、その作品のおよぼす影響を知ることの必要性を強調する。

ドイツにおいてヘルダーを受け継ぎ文学研究の歴史的な見方を体系化したのは、シェラーであり、実証主義的文芸学は1870年頃からの数十年ドイツの文学研究の大きな流れとなった。もちろんシェラーが影響を受けたのは、フランスやイギリスの実証主義であった。

実証主義の創始者として知られるコント (Auguste Comte/1798-1857) にとって人間の全ての認識の根源は、ただ観察できる知覚できる事実である。現象として現われるこの事実からのみ帰納法的に法則を定義する。

コントによると科学と人類の歴史は3つの交替した段階に分けられる。

最初の段階は、神学的あるいはフィクションの段階で人間は宗教的世界観を土台として絶対的な認識を目指し、自然現象を神的な存在の影響に還元した。2番目は、形而上学的で抽象的な段階で哲学と形而上学が神学と宗教に取って代わる。3番目の実証主義的な段階になって経験可能な事実以外の説明は放棄される。実証主義的な段階においては、因果関係と類似関係に基づいて観察と経験によって認識が得られることになる。

さらにシェラーに影響を与えた人物に、バックル (Henry Buckle/1821-1862) とテーヌ

(Hippolyte Taine/1828-1893) がいる。イギリス人のバックルは『イギリスの文明の歴史』(*History of Civilization in England*/1861)において、スペインやフランスやスコットランドやイギリスの文化史で自然法則による必然的な発展を検証した。その際彼は風土の文化的な現象に与える影響を強調した。

イポリット・テーヌの『イギリス文学史』(*L'Histoire de la Littérature anglaise*/1864)と『芸術哲学』(*Philosophie de l'Art*/1865)は、実証主義文学の綱領的な書となった。

「功名心や勇気や真実愛にも、たとえば消化や筋肉の動きや動物的な体温にたいしてと同様にその原因が根底にある。悪徳や徳も金属の含水硫酸塩や砂糖と同様な産物であり、それぞれの構成された現象は別な単純な現象の出会いから生じる。構成された現象はこれらの単純な現象に依存している。」⁽⁵⁾

彼は、道徳的な行為や精神的な産物と生物学的あるいは科学的な現象の差を認めず、原因と結果の因果律に還元できるとした。

文学作品の研究もそれを作り出した作家を知らねばならない。「血統」“race”，「環境」“milieu”，「歴史的な時」“moment historique”，この3つの要素が作者を規定する条件となり、したがってこれらから作品を説明できるとした。

シェラーもテーヌの定めたこの3つの要素に一致する「受け継いだもの」“Erebttes”，「修得したもの」“Erlerntes”，「体験したもの」“Erlebtes”の概念を作りだし、ゲーテを例として次のように主張する。

「彼の意図は、自らを敘述するのではなくて、自らを説明することである。(……)彼は、自分が他の者たちのお陰をこうむっていることを覆い隠そうとするのではなく、明らかにしようとするのである。彼が時代の方向を捉える以上に時代の方向が彼を捉えている。その時代の方向を見つけるのだ。彼は偉大なものの中でこの関係を説明し、そのことによって私達が今たどろうとしている道を自ら私達に切り開いてくれたのだ。(……)もし私達が、厳格な分析によって、彼の中に存在する力を分類し、諸力のほかの現象のなかでそれぞれを証明し、修得したものと体験したものから受け継いだものを選別し(……)その中に法則的なものを認識しようとするなら。(……)」⁽⁶⁾

彼によれば、ある芸術家の作品中で互いに似た要素が認識され法則化されるなら、比較は分類化を可能にする。比較によって初めてごくわずかな事実に関する資料しか持たない時代に関する確かな認識に文学史家を助けてくれる。既知の事から得られる歴史的類似性から過去を推測することもできる。

歴史的な類似は、原因と作品だけに留まらず、大きな歴史的な動きをも類推させてくれると

する。シェラーはドイツ文学の最盛期を600年、1200年、1800年においた。最初の興隆期を彼は、後の二つのつまり1200年頃の宮廷叙事詩やミンネザングなどの騎士文学の全盛期と1800年頃のドイツ古典主義の時代から推測した。波形の物理的な曲線のように規則的に興隆期と衰退期があるというのである。そして女性の影響が表れたとき興隆期になり、それを「女性的な時期」(die weibliche Periode)とし、衰退期を女性の影響がほとんど文学に影響を及ぼさない時期である「男性的な時期」(die männliche Periode)とした。

ところが、実際に文学作品を分析するにあたり作家に関するすべての要素をもらさず書き記すわけにはいかない。自然科学の法則のように原因と結果の因果律の法則によって作品のすべてをあるいは作家の全生涯を関連づけるには、人生は複雑すぎる。シェラーの目的が、個々の要素の分析を通して一般化つまり法則化することであったとしてもその要因となる事実の選択はすべて解釈者の主観によっているのではないだろうか。単なる資料の採集に留まらず、ひとつひとつの事実に関連をもたせるためには、研究者は自己の主観に頼るほかない。

シェラーに関して言えば、やはり彼自身、因果律の詩人の創造力に及ぼす限界も指摘している。そのうえ彼は、作家の心の中での作品の成立過程を理解するためには、同化が必要であり、作品の分析はこの同化を前提とするまで言う。感情移入を出発点にしたヘルダーが、客観的な資料をその裏付けに求めたのとは反対に、因果律から出発したシェラーは、その限界を打破する手段を同化に求めようとする。「思想的なるもの」を目指しながらなんらかの「美的なもの」に対する配慮がどうしても必要になることを証明する結果となった。

III

ディルタイの精神史 (Geistesgeschichte) は、実証主義の精神的な分野を自然科学の方法で解明しようとするこのような考えに反対するものと考えられている。

ディルタイの名は『体験と詩作』で高まり、様々な形でウンガー (Rudolf Unger/1876-1952)、コルフ (Hermann August Korff/1882-1963)、シュトリヒ (Fritz Strich/1882-1963)、クルックホーン (Paul Kluckhohn/1886-1957) 等に引き継がれた。

『体験と詩作』は、1905年に最初の版が出版され、1907年の第2版で『賢者ナータン』と『ゲーテの世界の文学上の意義について』を追加し、ゲーテ論を書き直した。ついで彼の死の前年の1910年の第3版で彼の思想を要約する『近世ヨーロッパ文学の歩み』をつけ加えた。

『体験と詩作』のなかの『ゲーテと詩的想像力』から少し長くなるが引用をしてみよう。ここでディルタイは、因果律で説明できる自然科学から精神科学を切り離してみせる。

「私を取り囲むすべてのもののなかで私自身がかって体験したものを再び体験する。私は夕闇のなかで私の足元に静かな町を見る。家々のなかで相次いでともる明かりは私にとって守られた平和な生活の表現である。私の独自の自己、私の周りの人間や事物という境遇のなかで、

作用によってそれらに与えられる価値ではなく、生のこの内容がそれらの生の価値を作るのである。そして詩作が第一に見せてくれるものは、これでありそれ以外のものではない。詩作の対象は、認識をしようとする精神のためにあるような現実ではなく、生の関連のなかで現れる私の自己と事物の性質である。ここから叙情詩あるいは、短編小説が見せてくれるもの——そしてそれらのために存在しないもの——が明らかになる。人生の価値は、人生そのものの関係のなかに基礎づけられた関連で結び付いている。この関連が、人々、事物、状況、出来事に意味を与える。このように、詩人は意味のあるものに取り組む。そして思い出や人生の経験とその思考の内容が、人生と価値と重要性の関係を典型的なものに高め、出来事が不変的なものの担い手とシンボルになり目的と素材が理想的なものになるなら、その時は、詩作のこの普遍的な内容のなかで現実の認識ではなく、生の意味において我々の存在に関する関係の最も生き生きとした経験が表現される。この経験以外に詩的なものの価値の理念と詩作が実現しなければならない美的価値は存在しない。」⁽⁷⁾

文学は、生を解明してくれるものであり。詩人は他の人々と基本的には同じであるが、感受性と体験の仕方が普通の人々より際だっている。想像力によって彩られた詩人の表現が人生を描き意味を探し出す。詩人は、人生の意味を解き明かすことにおいて普通の人間よりも優れている。

作家の生は原因と影響によって生じる出来事の連続としてとらえられるものではなく、個々の要因と経験が互いに関連する全体である。

「私達の存在の意識されない深みから普遍的で人間的なものを取り出すことにおいて、ゲーテはカントやフィヒテやヘーゲルの先験的な哲学 (Transzendentalphilosophie) やベートーヴェンの器楽曲と結びついており、本質の内的な法則からの人間形成の理想において彼はこれらの哲学者やシラー、フンボルト、シュライアーマッハーと同じであった。」⁽⁸⁾

ディルタイによれば、詩作が生在意義の解明である点においては、宗教や哲学などと変わらないが、詩作はより具体的な形で行う。我々は作品を読むことによってそれを追体験するのだ。そしてその追体験の対象となる体験の連関は、詩人を駆り立てた現実の連関ではなく詩人の想像力が作品の中で語らせている連関である。

実証主義への反逆という観点からみて、ディルタイの「精神史」をシュタイガーの「作品内在解釈」が引き継いでいると考えられているがどうであろう。

作品内在解釈は、作品をもつばら作品の中だけで把握できる現象だけで理解しようとする。どのような条件のもとでそれが作られたかとか、誰に向けられて書かれたかとか、どの程度文学的な伝統に従っているかなどは問題としない。芸術作品を、自立した美学的な創造物とし

て捉えることである。

解釈の基本は、作品から受ける感動だけである。

「文学史家に関しては、詩人の言葉つまり彼自身のための言葉は、どこかその背後やその上やその下にあるなにかではないからである。その本源、無意識からの芸術作品の起源を——あるいはそれが何であれ——私達は、直接的な芸術的印象が和らいだとき初めて問うことができる。この直接的な印象が私達に開いてくれるものこそが、文学研究の対象である。私達を捉えるものを理解することが文学研究の本来の目的である。」⁽⁹⁾

作品の解釈から主義や思想を除外し、因果律では詩的な現象は理解できないものとした。芸術作品への読者の根本的な関係が分析への出発点になる。そのかわり、文学以外の成立史、歴史、精神史的な視点は顧慮せず、文学の相互影響の歴史も顧慮されない。解釈の基礎となるのは作品と読者の一体感だけであるといってもよいだろう。いうまでもなく文学を徹頭徹尾「美的なもの」としてとらえた考え方である。

ところがシュタイガーと違ってディルタイの文学に対する考え方を見直してみると反発したはずの実証主義的な傾向があると指摘されても仕方がない理由もありはしないか。とくに『体験と詩作』の序文だけを他との関連なしに読むとリュウディガーが批評するようにディルタイが主として「思想的なもの」の平面で思考しているようにもとれる。

ここで彼はあたかも実証主義者のごとく以前の時代やそれぞれの時代の思想や科学の発展ならびに社会状況が文学に及ぼす影響を考慮する。

ここで文学は政治的軍事的共同体の精神によって規定されたものとみなされる。ついで従うにせよ反抗するにせよ神学的体系の網からでることができない存在と人間は規定される。そしてその後、ガリレイやケプラーなどによって神学体系が崩壊したが、まだ因果律的な思考には慣れていない時期を文学が生々の価値と我々をとりまく世界の意味の解明に取り組んでいる時期だとした。

どの時代を観察するにしても、その根底には、絵画や音楽などとの親近性、読者や観客層の移行、地域性、共同体から神学を経て法による変化などが時代を規定する要素として強調されている。

ディルタイは、世界観を3種類のタイプに分類しそれを文学にも適用する。第一に経験論からコントの実証主義にいたる因果律に頼るタイプ。つぎに自然に対する精神の独立を強調し精神的な態度や道徳的な態度のなかに現実を規定する可能性を見るタイプ。最後に自然の世界を内的なものの表現として描きながら、それらが有機的に結びついているとタイプである。

神話や伝説から始まる互いに他を規定する歴史の推移の段階が描かれている。

ここでディルタイの『解釈学の成立』(*Die Entstehung der Hermeneutik*/1900)の手稿の中の次のような文章に注目してみる必要があるだろう。

「この論理的問題もまた、むしろ、つねに同一である。精神科学と自然科学とで、同一の基本的な論理的作業が行われるのは(……)、自明のことである。帰納、分析、構成、比較。けれども、だから、いま問題なのは、それらが精神科学の経験領域の内部でどんな形をとるか、ということである。」⁽¹⁰⁾

因果律的ではなく、詩人の内面で再構成されているにせよ作品が社会的環境や時代や読者層などに影響を受けていることは、まぎれもない事実である。そしてそれを読む者は、追体験という手段で自分のものでない生を体験することによって作品を把握するのであるが、それには歴史上の知識が前提となる。ディルタイによれば、シュライアーマッハー以後、解釈の過程を文法的、歴史的、美学的な解釈に分解してしまうことは退けられたが、それらの知識は解釈の前提となり、詩人も因果律的ではないにせよ、それらがどの程度作用しているかは別として、それらのいずれにも規定されている。また他人に解釈を伝えるためには、関連する作品への比較、それを引き起こした環境への説明は不可欠だという。

ディルタイは、自然科学から精神科学を切りはなそうとしたのであるが、過去の文化の段階に類型学的な概念を持ち込んだ。その点においては、多分に彼は実証主義的であったとも言えるし、その基盤の上に解釈者の才能に依存した追体験を置いた所からみても、歴史性を主張しながら天才による感情移入を作品理解の条件とするヘルダーへの距離は意外と近いのではないか。作品に共存しながら同時にとらえようとする逃げた「思想的なもの」と「美的なもの」の間を文芸学の歴史は揺れ動く。ディルタイの思想は、その間を埋め文学研究の客観性と主観性の和解を求めた先駆者として評価されるべきではないだろうか。

(本学講師＝ドイツ語担当)

注

- (1) 高橋義孝『高橋義孝文芸理論著作集 下』京都, 1977。
- (2) 前掲書 338頁。(DILTHEY, Wilhelm: *Das Erlebnis und die Dichtung*, Göttingen, 1985, S. 7)
- (3) たとえばエルンスト・トレルチュは、精神の貴族主義として民主主義やマルクス主義に対置させた。ドイツ的なものを単純に公式化しそれに特別な意味をあたえる傾向は、国家社会主義の宣伝の道具になる危険があった。とりわけ、すべてを階級闘争の歴史に還元しようとするマルクス主義にもとづく文芸観は、攻撃の対象になった。
- (4) HERDER, Johann Gottfried: *Sämtliche Werke*, hg. v. Bernhard Suphan, Berlin, 1912, Bd. 8, S. 327.
- (5) TAINE, Hippolyte: *Geschichte der englischen Literatur*, Leipzig, 1878, Bd. 1, S. 10. (in: GUTZEN, Dieter: *Einführung in die neuere deutsche Literaturwissenschaft*, Berlin, 1976, S. 146)
- (6) SCHERER, Wilhelm: *Aufsätze über Goethe*, Berlin, 1900, S. 24 f. (in: GUTZEN a.a.O., S. 151)
- (7) DILTHEY, Wilhelm: *Das Erlebnis und die Dichtung*, Göttingen, 1985, S. 126.
- (8) DILTHEY: a.a.O., S. 141.
- (9) STAIGER, Emil: *Die Zeit als Einbildungskraft des Dichters*, Zürich, 1953, S. 11.

- (10) DILTHEY, Wilhelm: *Gesammelte Schriften*, Bd. V, Stuttgart, 1957. (引用は久野昭訳『解釈学の成立』東京, 1981, 52頁によった。)